

中世後期の堅田とその実態

――堅田本福寺をめぐる二つの記録から――

田 口 綾

〔抄 録〕

中世堅田研究において、『本福寺由来記』および『本福寺跡書』の記述は、通説を形作る論拠の中核を担ってきたが、この両記録に対する史料批判が、堅田に関する先行研究ではほとんど行われてこなかったという問題がある。

その問題を受け、本稿では、両記録の堅田関係の記述を中心に比較検討を行い、史料として扱う上での問題点と注意点を再検討し、その上で、両記録の記述を中世堅田研究の史料としていかに

用いるかを考察した。

その結果、両記録の記述だけでは、中世堅田を論じる史料としては不十分であることが明らかになった。今後の堅田研究では、両記録の記述だけに頼らない、新たな視点が必要である。

キーワード 中世堅田、本福寺由来記、本福寺跡書

はじめに

中世の堅田は、その地理的条件から交通の要衝として発展し、先行研究においては時に『中世都市』^①とも称される。その特徴として、湖上活動における「特権」(関・上乘・漁業・廻船)を有していたと言われ、近世の堅田研究にも通じる重要なトピックとされている。^②

この問題の論拠の中核となっているのは、『本福寺由来記』(以下

『由来記』)と『本福寺跡書』(以下『跡書』)の二つの記録である。これらの記録は、中世から現在まで堅田に続いている浄土真宗本願寺派本福寺に伝わるもので、その主な内容は、本福寺やその関係者に関する話である。そもそもは一向一揆研究の中で注目されたものであったが、堅田の様相についてもまとまった記述があつたことから、その後は堅田の集落構造等の研究においても引用されてきた。

本稿では、この『由来記』と『跡書』の中の、堅田に関する記述部

分を比較することで、両記録の違いを明らかにする。結論から言うと、両記録の記述は一見よく似ているものの、実際には明確な違いがあり、区別して用いる必要がある。また、その記述内容の全てを事実と考えることは難しい。しかし、これまでの堅田研究では、両記録の記述を特に区別せず、ほぼ無批判に受け入れることによって、中世堅田の姿を描き出してきた。本稿の目的は、両記録の史料批判上の問題点、注点を明確にし、その上で、両記録の記述を中世堅田研究の史料としていかに用いるかを考えることにある。このような作業は、今後、中世堅田の実態を考えていく上での、基礎的な要件のひとつとなるものと考ええる。

第一章 本福寺の二つの記録

一、『由来記』、『跡書』の史料批判の問題点

『由来記』は本福寺第五代住持である明宗が記したものと考えられ、⁽³⁾『跡書』は第六代住持の明誓が記したものである。⁽⁴⁾記されている出来事のうち、それが起きた年代が推定できるものを参考に、『由来記』は永正四年(一五〇七)から同六年までの二年間、『跡書』は天文十年(一五四一)の前後数年の間に成立したものと推測できる。⁽⁵⁾双方とも、一つ書き、あるいは段落や行間を設けることで記事が分けられるというよく似た記述形式である。また、共通する内容の記事が多いことから、『由来記』は『跡書』執筆時に参考にされたものと考えられる。

この二つの記録に対する史料批判の必要性について、言及した研究

もいくつかある。しかし、『由来記』と『跡書』の違いについては考察されていない、⁽⁶⁾考察したとしても本福寺関係者の動向部分のみであるなど、⁽⁷⁾堅田研究の上では十分とは言えない。

堅田関係の記述部分について、わずかながら言及したのが神田千里氏で、神田氏は両記録の違いから、『跡書』の成立時期に本福寺住持が堅田の故実に対して関心を深めていた可能性を指摘している。⁽⁸⁾ただし、神田氏の論考も、真宗寺院の記録から当時の真宗僧侶・門徒の思想を読み解くという視点で比較を試みたものであり、その指摘はあくまでも簡潔なものにとどまっている。

そこで以下では、堅田関係の記述部分を中心に詳しい比較・検討を試みたい。

まず両記録全体では記事の数に大きな差がある。一つ書きや段落、内容等を頼りに記事を分けると、『由来記』の記事数が約四〇であるのに対し、『跡書』の記事数は百を越えている。『跡書』前半と『由来記』とは共通する内容が多いが、記される順序には若干の違いも見受けられ、両記録の構成に違いがあることが読み取れる。そして、『跡書』後半部分の記事の大半は、『由来記』には同様の内容の記述がない『跡書』独自のものである。

『跡書』の構成は、全体を大きく三部に分けることができる。初めの部分は、本福寺の由緒や過去の住持の逸話、本願寺と関わる出来事等が並んでいる。次に堅田に関わる記事が続き、先行研究では主にこの部分の記述が引用されてきた。そして最後の部分が『跡書』の大半を占めており、その多くが一家衆の動向と、その不興をかうことへの

表1 『由来記』および『跡書』の記事一覧

	本福寺由来記	本福寺跡書
1	「当寺仏法再弘之事」	「本福寺毎年十二月之念仏御頭之事」
2	法住、仏光寺に帰依する事。仏光寺と相論の事。	鴨義綱の伝説と、三上三家の事。
3	法住、本願寺に出仕する事。	「本福寺善道俗姓之事」
4	「妙専尼懐妊夢相ノ事」	本福寺の縁者の事。
5	妙専尼、往生する事。	「妙専尼懐妊夢相之事」
6	存如、蓮如、本福寺と道西道場へ下向する事。	山門の成敗で奪われた関上乘を、反撃して取り返す事。(a') (※)
7	「当所ノ宮仕、魔ニオカサル、事」	新在家坊に、十八講田を寄進する事。
8	法住、本弘寺大進と手次について争う事。	蓮如、吉崎殿、出口殿、山科の御影堂を建立する事。
9	「無碍光御本尊御免之事」	山科の仏事と近松殿の事。
10	「御開山御影様御免御下向之事并御寿蔵」	「無碍光ノ御本尊御下向之事」
11	「御伝絵御免御下向之事」	「御開山聖人様御影并蓮如上人様御寿蔵御免之事」
12	「大谷御流破却之事」	「御伝絵御免之事」
13	「御本寺様之生身之御影像本福寺へ御下向之事」	「御本寺様ノ御開山生身ノ御影様御下向之事」
14	堅田にて、蓮如を迎える事。	「唯賢道場火事之事」
15	唯賢道場の火事の折の本尊の奇譚の事。	「存如上人様并蓮如上人様門田法西へ御下向之事」
16	「生身御影様大津浜御着岸之事」	「本福寺北ノ栴檀ノ木へ宮仕釣上ル事」
17	法住と大夫、本願寺へ祇候する事。	「本弘寺大進公手次争事」
18	法住の病を蓮如、順如が見舞う事。	「東山大谷殿破却之事」
19	東近江衆、法住の信仰について評する事。	「生身御影様大津浜御着岸之事」
20	「地下故実之事」(A)	堅田大責の事。(a)
21	堅田還住の礼銭の事。(B)	堅田還住の出銭の事。(b) (※)
22	殿原衆と全人衆、双方立ち会いて検断をなす事。(C)	堅田四方の事。(f)
23	大御堂講出仕の時の、左右の座の事。(D)	惣の紋の事。(g)
24	上乘の由緒の事。(E)	堅田の三つの名字の事。(g2)
25	堅田四方の事。(F)	稻荷の宮の事。
26	地下の侍の三つの名字と惣紋の事。(G)	堅田の四月の祭礼の事。
27	十八講の事。(H)	上乘の由緒の事。(e)
28	鎌倉殿の前で六角氏と沖の葎について争い、堅田が勝つ事。(I)	鎌倉殿から沖の葎について認められ、足利殿から関を与えられる事。(i)
29	法住、明顕、新在家坊を寄進する事。	宮切と東切、千万歳を争う事。(※)
30	馬場道場建立資金の不足に、蓮如奉加の事。	「大宮参詣ニ道幸夢相之事」
31	存如、蓮如の下向に、法住響應する事。	法住の病を蓮如、順如が見舞う事。
32	山門に礼銭を支払う事。	法住、大夫と山科へ参する事。
33	已講、親鸞へ土地を寄進する事。	法住、吉崎で蓮如と対面する事。
34	「於当寺毎月十八日御念仏御頭之事」	野洲栗本老衆が法住の仏法を批判するに、蓮如が反論する事。
35	門徒十二組と、本福寺の参銭の事。	法住、蓮如に不断香を教える事。
36	蓮如の吉崎下向の事。法住、吉崎で蓮如と対面する事。	法住ら、出口殿の仏事に参る事。
37	法住、新在家坊を建立する事。	法住、出口殿へ年始の御礼に出仕する事。
38	出口殿報恩講の事。	法住、往生する事。
39	法住、出口殿へ年始の礼参りに行く事。	法住、明顕、新在家坊を寄進する事。
40	野村殿にて、法住不断香を教える事。	法住、文明拾年十二月十六日、八十三才で往生する事。
41	法住、往生する事。	本福寺の炎上と再建の事。
42	本福寺の炎上と再建の事。	本福寺へ新年の参銭等の事。
43	「道幸夢相物語ノ事」	本尊の前で、三々九度の盃の事。
44		毎月十八日の念仏御頭の供養の事。
45		本福寺への二季彼岸銭の事。
46		明顕の代に、惣中から本福寺への参銭が増やされた事。
47		蓮如への年始の進物の事。
48		御開山への参銭の事。
49		御本尊への参銭の事。
50		本福寺門徒の所役の事。
51		一家衆の威勢に対する本福寺住持の覚悟の事。
52		本福寺門徒についての心得の事。
53		言葉を悪く使う人の事。
54		仏法の志のある人の事。
55		仏法の志ある人の言葉の事。
56		一家衆が本福寺門徒を直参化すること等に対する本福寺住持の心得の事。
57		在所の上々御坊の機嫌を損ねぬよう心得る事。
58		御坊ができて実入りが減ったことによる経済的心得の事。

59		勘気による死に様（三度目の勘気にて明宗餓死する）の事。
60		地元に一家衆がいない寺は、子どもを手放さずにすむ事。
61		明宗の代に、財政的に困窮する事。
62		仏物を浪費する者たちの、報い逃れがたき事。
63		どんな悪人も、後生には報いを受ける事。
64		田地を買う時は、一家衆の目を避けるため、他村の他宗に預ける事。
65		御門徒の老の有様の事。
66		地元に一家衆がいない坊主を、うらやんではいけない事。
67		上様へ万進上すべきと心する諸国坊主と、御坊を本とする御門徒の事。
68		門徒が本寺に、坊主が本願寺にばかり参ると、一家衆が心得違いだと思う事。
69		上様への志を無くしてはいけない事。
70		法覚と大北、永正〇年頃まで本福寺に年始参りする事。
71		御内衆に贈り物をする、色々上手くいく事。
72		分限であれば心豊かに仏法に物をかける事。
73		仏法を広めるのに適した時期や手法の事。
74		荒れたる人への御本寺からの折檻の邪見、傲慢な事。
75		隣郷門徒の里にて、人に経を読み聴かす時の心得の事。
76		御門徒には謙虚な態度でいるべき事。
77		難題を持ちかける者に耐える事。
78		坊主が使う椀の事。
79		本願寺、一家衆、御内衆の料足を借りてはいけない事。
80		賀州の願生の話の事。
81		課役を果たすため田地を買うと、後で問題が起こる事。
82		永正十五年、本福寺、勘気を受ける事。
83		大永七年、本福寺、勘気を受ける事。
84		天文元年山科御破の折、勘気を受ける事。
85		法住の養子賢智、御堂衆になる事。
86		存如、蓮如が下向の時、法住が参上した事。
87		永正三年越前へ入国の時、実如の命により、明宗、海津の門徒を救う事。
88		永正四年、実如が堅田へ下向する際、明顕が船を用立て助ける事。
89		百姓の事。
90		坊主も門徒も御流をし損なうと、今生来世でも上手くいかない事。
91		御一家の御憎みの事。
92		芸事にのめり込んで生活が立ち行かなくなる事。
93		万の物を誂える者、万食物を売る者は、不作の年も死なぬ事。
94		不作の年に大事になり、餓え死にする職の事。
95		御本尊箱・御聖教箱の封の方法の事。
96		大切な物は錠をかけ、その錠に封をする事。
97		皮篋等の中身を抜く手口の事。
98		治部助、本尊箱の中身を盗まれる事。
99		人の間の仲介についての心得の事。
100		本福寺は代々の覚えが良かった頃の通り身を処すので御一家の目に余る事。
101		本寺の覚えが良い一家衆に憎まれると、不幸な運命をたどる事。
102		一家衆のいない国では、勘気を受ける坊主はいない事。
103		一家衆は、大きな罪以外の、些細なことで咎にする事。
104		一家衆が、借りた御影などを返さず、大坊主を勘気になすを嘆く事。
105		一家衆にはわずかでも気を許してはいけない事。
106		御坊を建立する人は、御勘気あって地獄に堕ちないことはない事。
107		永正四年、実如、志賀・高島の講にて明顕らの座順を直す事。
108		明宗、実如の意で、諸国より上げられた破れた御本尊を火にくへ功德湯を焚く事。
109		明宗、大津へ御影を届けるとき、野村殿に参らず不興をかう事。
110		永正十五年頃の堅田御坊の畳の張り替えに実如がもの申した事。
111		堅田御坊御堂の改築が実如に不評の事。

〔注〕

- (1) 記事の番号は、一つ書き、もしくは段落、内容ごとに筆者が付したものである。
- (2) 記事に「…之事」という見出しがある場合にはその見出しを記し、それ以外のものについては、内容を簡潔に記した。
- (3) 堅田に関する記事は■で示し、その中で本福寺関係者の登場する記事には(※)を付した。『由來記』と『跡書』で内容が共通するものには、対応するアルファベットの太文字と小文字をそれぞれ付した。
- (4) 本表の前半部の作成にあたっては、神田千里氏が作成したものを参考にした。(本文注〔3〕 同氏論文)

警戒を促す記事である。⁹⁾『跡書』が記された当時、堅田には一家衆である蓮淳が進出しており、周辺の本福寺門徒の直参化を進めていた。そのため、本福寺は経済的に困窮することになり、さらには蓮淳の不興をかったことで、何度も勘気を受けた。『跡書』は本福寺にとって非常に不遇な状況の中で記されたものであり、この点が、『由来記』と『跡書』の成立背景の大きな違いであると言える。¹⁰⁾

つまり、『跡書』の執筆意図は、ただ本福寺の歴史等を語るだけでなく、後代に対する警告、教訓、思想を伝えるところにあり、その内容には多分に執筆者の主観が入り込む余地があったことになる。あからさな嘘が記されているという訳ではないが、少なくとも、本福寺に不利、不必要な内容が記されていないことは間違いない。『由来記』にしても、本福寺に都合が良い内容を記そうとする意志は当然働いていたものと考えられる。

そして、このような「本福寺の為の記録」に堅田に関する記述が記されていることは、その内容が本福寺に対してどのような意味を持つかを考える必要がある。執筆者の意図によつては、必ずしも事実が記されたとは限らず、その点を考慮せずに堅田の有り様を示す史料として用いることには、やはり問題がある。そこでまず、両記録を扱う上での注意点について考察したい。

二、両記録の記述を扱う上での注意点

表一から分かるとおり、『由来記』と『跡書』に見える堅田に関する記述は、両記録とも一連の記事群として記されているが、その中で

例外的に記事群から外れているものに、『跡書』(a')がある。この記事(a')としたのは、『由来記』(A)および『跡書』(a)との間に話題の重なる部分があったからである。しかし同時に、『跡書』(a)は『由来記』には共通する記述が見られない『跡書』独自の記事であるということもできる。まずは、この『跡書』(a')を中心に、『由来記』と『跡書』の記述を比較してみる。

『由来記』(A)は、応仁二年(一四六八)に堅田が海賊行為を咎められて山門から攻撃を受けたという「堅田大責」(以下、大責)と称される事件のあらましについて記された記事である。『跡書』(a)と比較してみると、その内容や話の流れはほぼ同じであると言える。

『由来記』(A)

一 地下故実之事

応仁二年三月廿四日堅田大責ト廻文マワリテ、同廿九日城ノキワヘ敵ツメテ、ヲメキサケンテセメタリケリ、山門ヲテキニウケテンケレハ、東西南北ミカタスル里モナシ、ワレモくト海ノ中ニオキニユカナントヲカキテヨロツサイホウアシヨワヲオキタリケル、(中略)、ウミナリイカニヲキツルモノトリ入テ、ソノ日オキノ嶋ヲサシテ舟ヲオシイタシ、ヨキシユン風ナレハホヲアケテオチ行、ヤカテシマヘソトツキタル、東ウヲノ将監方オチハヲチラルヘキニ、地下ノハタヲトリニモトリテ、テキニアヒ下ハ、ニシノウミハタニテハラヲキラル、サテアクル四月一日カタ、ノサイ礼ヲオキノシマニテハヤシタテケリ、カ、ル乱劇モミキ方ノモノ京ヘツクヲトリチラシ、剩人ヲ多クコロ

シケル故ナリ、モミ井方ハ公方様御藏奉行ニテ山門へ相フレテ
如此成敗ヲナスナリ、サテ文明元年ニ山門へ託言シテ文明第二
ノ曆十一月九日ニ堅田ヘナラル、

『跡書』(a)

応仁^ニ三月廿四日ヨリ、堅田大責トアヒフレテ、敵ノ諸勢堀ノ
キハマテトリヨルヲ、雄琴・ナウカマテ追払コト度ミナリ、ツ
合ノ勢百八里ノ軍勢、手ニタマラストハイヘトモ、湖上海賊ノソ
ノ罪ノカレカキトイヒ、剩^{アマサ}多ノ人ヲコロセシ重料トイヒ、公
方様ノ御藏奉行モミ井方財物ナレハ、山門ヘアヒフレテ、如^{コト}此
御成敗ノ旨シノキカタクテ、衆徒モセチカク^{シヨ}当所ヲ調伏セシコ
トイフニ及ス、(中略)、オキニハイカヲカキテ、万ノモノヲラク
ニ、ノキサマニミナ船ニ入トリノリ^イカタク、惣庄ノ旗ヲソノ
マ、ステタルナリ、モンハアラエナリ、順風ナレハホヲアケテ、
奥ノ嶋ヘオチユキケリ、トキノマニハセツク、

同廿九日小ノツモコリナレハ、アクル四月一日カタ、ノ祭礼ヲ
ハシメノマツリナレハ、ハヤシタテタリ、

今堅田ハカタタニ同心スマシキトテ、セメ衆ニ一味シテセムル
トハイヘトモ、カタタノヤクルトヒ火ニ、今堅田ノイヘコト^ハ
クノコサスヤキタリ、

両記録の記述とも、山門側から攻撃された堅田住民が、堅田から逃
亡する内容を記している。一方『跡書』(a)を見ると、同じく大責
から始まる記事ではありながら、その内容は大きく異なっており、主
題となっているのは大責それ自体ではない。

『跡書』(a')

応仁二年、花ノ御所ノ御材木上ル年ヨヲミナミタマハル井公方
ノ御藏奉行モミ井方財物ニ海賊ヲカクル、ソノ罪科故、延暦寺ヘ
イキトリアリテ、山門ヨリ成敗ニヨテ関上乘ヲ途津三浜馬僧等
陰憐堂ニタテヲキタリ、其已後又三院ヨリ途津三浜ヲ発向ノトキ、
堅田衆手ヲクタク退治ヲ加ヘキ一義有レ之間、堅田四方ノ兵船ノ
テツカイヲモテ、命ヲチリアクタニカロンシテ、セメ入コミツク
シ、焼ハラヒ、本意ニ落居ス、仍関上乘ヲ取返^{トリカヘ}処也、(中略)、
カ、ル惣庄ノ大慶ニ上ノ関ヲ全人衆ヘ殿原衆出ノ砌、一兩年知
行ノ処ニ、本福寺ノ明顕異見ニ関ヲトルニ、万端カマフ儀多カ
ルヘシ、タ、コノ関ヲ斟酌シテ、公儀国方ノマカナイ、家別屋
別トキナラヌ出銭ク^{シユセシ}リ事、何シラスニナリテ、コノ上ノ関ニ
テセラルヘキナリト、返テヨカルヘキトノ義ニテ、ソノ理ニテ
上ノ関屋ヲカヘシタリケリ、

この記事によれば、大責によつて堅田の「関上乘」は途津三浜の馬
僧等の手に移った。その後、堅田住民は途津三浜に攻め込む機会を得
て「関上乘」を取り返すことに成功した。そして、奪還に成功した後
には「上ノ関」が「全人衆」に与えられた。しかし、明顕(本福寺第
四代住持)の「関ヲトルニ、万端カマフ儀多カルヘシ」という意見に
よつて、その収入を公的な出費に充てることとし、「上ノ関」は「殿
原衆」に返された。

見て分かるとおり、この記事は堅田の「特権」について触れられた
ものである。さらに、本福寺関係者と「全人」との関係の強さを示唆

する記述もある。この「殿原」と「全人」は中世堅田を二分した身分構造であるとされており、その内容の重要さを考えれば、同様の内容の記事が『由来記』に存在しないのは不自然である。さらに言えば、「殿原」と「全人」に関する記述があるのは、この『跡書』(a)を除けば『由来記』(B)、(C)、(D)の三つだけである。そしてこの『由来記』の三つに対し、「殿原」と「全人」に関する記述はないものの『跡書』にも対応する内容の記事が存在するのはひとつしかない。そのため先の神田氏は、『跡書』成立時には「殿原」と「全人」の区別が意味を持たなくなっていた可能性があると指摘している。¹²⁾だとすれば、なおのこと『由来記』にも同様の記述が存在してしかるべきであろう。

ここで注目したいのが、『跡書』(a)には本福寺の関係者が登場しているという点である。両記録の堅田に関する記事群を見比べると、本福寺関係者が登場するのは『跡書』の記事だけであることが分かる。その内のひとつで、『由来記』にも同様の内容の記述があるのが『跡書』(b)である。そこで、内容が共通する『由来記』(B)と合わせて見てみる。

『由来記』(B)

一 殿原・全人ニヨラス其時料足過分ニ出ス人還住ス、サナキ人ハフタ、ヒ地下ヘナララサルナリ、(後略)、

『跡書』(b)

文明二年堅田逃ノ衆、拳テ還住ノ談合ト云、地下ハスナ三合ノ所ヲ、過分ノ礼銭礼物ヲモテ、山門ヲト、ノヘシニ、惣次ニマ

シテナヲ法住ハ三百八十貫文、弟法西ハ八十貫文、大北兵衛ハ百二十貫文、塩津兵衛入道法円ハ百貫文、堅田庄内ヘ引違如此歴然也、(後略)、

これらの記事は、先の『由来記』(A)、『跡書』(a)の流れを受けたものである。大責によって堅田から追われた住人が、山門との交渉を行い、礼銭を支払うことによって堅田への帰還を果たしたことが記されている。『由来記』(B)では「殿原」も「全人」も区別無く、礼銭を支払った者が帰還できたとあるが、『跡書』(b)では「殿原」も「全人」も登場せず、法住(本福寺第三代住持)等の本福寺関係者が多くの礼銭を支払ったことに焦点が置かれている。先の『跡書』(a)が堅田における本福寺関係者の発言力を示すものだとすれば、この『跡書』(b)はその経済力を示すものと言える。にも関わらず、『由来記』には同様の記述が存在しない。

先述のとおり、『跡書』が記された当時の本福寺は苦境にあった。『跡書』のみに見られる本福寺関係者についての記述は、少しでも堅田内部における本福寺の立場を強化するため、『由来記』成立よりも後になって創作されたものである可能性も考えられよう。また『跡書』(a)の場合は他の堅田関係の記事から離れて記されており、執筆者の『跡書』全体の構成時点での意図も含めて検討を要するものであると言える。

以上のように、両記録の記事は、堅田に関する部分においても執筆者の主観が入った可能性が指摘でき、特に『跡書』ではその可能性がより強く指摘できる。内容の全てが創作とは言えないが、可能性が捨

てきれない以上、他の史料による裏付けも無く安易に用いるべきではないだろう。

加えてひとつ注意しておきたいのが、『由来記』、『跡書』の双方とも、堅田に関する記述のほぼ全てが執筆時よりも過去の話だという点である。先の大責からして両記録の成立よりおよそ半世紀も前の出来事であり、記事によつては百年以上も遡る内容のものもある。つまりその内容は、執筆時の創作でない限りは、伝聞等により執筆者が間接的に知ったものだということになる。しかし、その執筆者への話の伝達過程は記されておらず、記事だけを見て内容の真偽を判断することはできない。そればかりか、執筆時よりも過去の話だということは、執筆当時の堅田の有り様も記述から知ることはできないということになる。この点からも、『由来記』や『跡書』の堅田関係の記述を、そのまま事実として用いることには問題があると言えよう。

とは言え、その内容の豊富さから見ても、『由来記』と『跡書』の記述が、中世堅田の姿を考える上で重要な史料であることは間違いない。そこで次に、先述の両記録に対する史料批判上の問題点、注意点を踏まえ、両記録以外の史料も使いながら、中世堅田の実態を描き出す上で、両記録の記述をいかに用いていくかを考えたい。

第二章 中世堅田の活動の実態

一、堅田の住民集団とその活動

先述のとおり、『跡書』の記事の中には、堅田に関する記述の中に、本福寺関係者の動向が加えられたものがある。しかし一方で、本福寺

関係者が登場しないにも関わらず、『由来記』から『跡書』にほぼ同じ内容で継承されている記事も存在する。史料の性格から考えて、本福寺に全く関係ない記事をまとめて記すとは考えにくい。ため、本福寺関係者が登場しない記事は、「本福寺を含む堅田全体」に関係するものと考えることができよう。そこで次は、本福寺関係者が登場せず、かつ堅田について記された記事に注目してみる。

先の大責関係のものを除いて、『由来記』と『跡書』で内容が共通し、かつ『跡書』においても本福寺関係者が登場していない記事を見ると、まず挙げられるのが『由来記』(E)と『跡書』(e)である。

『由来記』(E)

一 堅田三方トハ北ノ切・東ノ切・西ノ切也、四方トハ今堅田ヲクワヘテイフ、北ノ切ヲ宮ノ切トイフハ、当社切ノマン中ニオハシマセハ、ミヤヲカタトリテイフナリ、コノ四方ノウチニハマツ宮ノ切惣領ノ切ナルヲ東ノ切ヨリ渡崎ノチャウトハトクコノ地下ノハシマリナレハイフトアリ、(後略)、

『跡書』(e)

堅田三方トハ宮切・東切・西切也、今堅田ヲ加テ四方トス、宮ノ切ヲ余ノ切ヨリ北ノ切トイフ、大宮コノ切ノナカニオハセハ、カタトリ宮ノ切トイフ、コレヲ里ノ町トモイフ、大友スマセタマフ御里ナレハイフナリ、当所ノ総領也、又東ノ切衆、渡崎ノ町トテ、ワガ切サトノハシマリトイフ、(後略)、

これらの記述内容は堅田の在地構造に関わるもので、堅田が内部を宮切（北ノ切）・東切・西切・今堅田の「四方」に分けて把握されていたことが読み取れる。その「四方」がどのような分け方によるものなのかは、ここに見える記述だけでは判然としない。しかし、史料中の「大宮」とは堅田大宮（現・伊豆神社）であり、それが「コノ切（北ノ切）ノナカニオハセハ、カタトリ宮ノ切ト」言ったとあることから、居住領域に関わる分け方であったものと推測できる。近世の堅田の宮座組織について詳細に検討した小栗栖健治氏は、『由来記』、『跡書』に記された「四方」は集落形態のまとまりを表現したものであり、その状態は近世に引き継がれたと指摘している。そして、中世の「堅田四方」の内、宮切と東切が堅田大宮、西切が神田神社、今堅田が伊豆神田神社を中心とする宮座組織をそれぞれ形成していたとしている¹³。つまり、『由来記』、『跡書』に記された「四方」の別は、住民組織の別にも関係しており、その状況は『由来記』、『跡書』が執筆された当時にも当てはまることになる。

では、この「四方」に分かれた状態はいつ頃成立したものなのか。伊藤裕久氏は、土地売券などに記された小字名に「切」が見られるようになるのは大責があったとされる応仁二年以降であり、一方でそれまで見られた「浦」が見られなくなっていることから、大責を契機として「浦」が「切」へと変質したのであるうとしている¹⁴。ただし、堅田の内部が複数に分かれた状態ならば、十四世紀末にすでに見ることができる。

応永四年（一三九七）、湖北の菅浦と堅田の漁師との間で、湖上の

漁業域について相論が起こった。その相論の際、菅浦と堅田漁師との間で改めて漁場の取り決めが成され、契約状が出されている。

「^{端裏書}かたゝの証文之状」

近江国堅田与菅浦海上相論事

右契約趣者、海津之地頭所之御媒介仰申、潮上^潮のすなとりのし^{（四至）}はうし^{勝示}を定申処如此、然塩津口西東并大崎・同海津前不可^{有脱}子細者也、就中小野江・片山・ほうちやう被直差候条、殊更以喜悦候、

然聞此上者、海上すなとりにて、聊雖為、子々孫々違乱妨成申、更々不可有者也、仍為後年証拠明鏡四時^至はうし状如件、

今堅田 道賢（花押）

西浦 妙願（花押） 次郎左衛門（花押）

惣領 道寂（花押） 道信（花押）

道満（花押） 道観（花押）

道忍（花押）

応永四年十一月廿四日¹⁵

この文書は「かたゝの証文」であり、契約を交わした内容は「近江国堅田与菅浦海上相論事」についてである。しかし堅田側の署名には、「惣領」、「西浦」（これが後の「西切」であると考えられる）、「今堅田」のそれぞれで分けて記されている。これらが集落形態のまとまりを表すならば、おそらく署名しているのは各集落の代表者であろう。つまり、堅田全体として相論を行う一方、内部では複数の集団が個々に関わっていたとも考えられるのである。

さて、『由来記』（E）や『跡書』（e）の記述によれば、宮切は

「惣領ノ切」、「当所ノ総領」であつた。そのため、先行研究では宮切住人が堅田の上位層であり、「特権」を掌握する者であつたと考えられてきた。¹⁶⁾しかし、そこには少々疑問が生じる。

先述の菅浦との契約状を見ると、署名の中に東切の前身と思われるものが見られない。もちろん、この相論があつた当時にはまだ集団自体が存在しなかつたという考え方ができない訳ではないが、もうひとつ考えられるのが、東切の前身である集団は、その相論に関わらなかつたという可能性である。

近世の話であるが、堅田漁師はそれぞれの「切」ごとに異なる漁法、異なる漁業域で活動していた。これらの集団は互いをまったく別の存在として認識しており、漁場の主張や相論においても、それぞれが個別に行つていた。¹⁷⁾ときには互いを相手取つての相論に至ることもあり、その個々の独立性の強さが伺える。¹⁸⁾

近世の住民組織の別が中世から引き継がれたものであるなら、各自の活動の独立性もまた、中世から成立していて何ら不自然ではない。つまり、中世堅田における諸々の活動もまた、個々の住民組織ごとに独立して行われていた可能性がある。そして、その可能性が見られるのは漁業だけではない。

預り申御関之事

合四ヶ所者 警固関之内四分一之分一事

同式頭分之事

新関十分一之事

駄別十分一

跡書

以上

右件之御関者、公用錢五貫文仁相究、為惣中預り申者也、然者毎年十一月中仁運上可申者也、万一於無沙汰者、当嶋之舟於何方成共可被押召者也、仍為後日預り状如件

永禄八年乙丑年三月廿日 沖嶋惣代一和尚

定勝

中老代 三郎衛門

若衆代 小太郎

堅田両切

御番頭様 参¹⁹⁾

この史料は、永禄八年(一五六五)に沖島から堅田へ宛てて出された関の預状である。これによれば、沖島惣中は堅田から「警固関」を預かつており、その公用錢五貫文を、毎年十一月に運上することになっていた。当時の堅田が沖島に対して影響力を持っていたことを表す内容であるが、署名に花押が無く案文にも見える一方、伝えられているのは宛先である堅田側であり、偽文書である可能性も捨てきれない。ただ、ここで問題にしたいのは文書の真偽ではなく、宛所の書き方である。この書状の宛所は、「堅田両切」の番頭になっている。さらに、堅田にはこの前年に沖島の関の公用錢の詳細を伝える内容の文書も残されており、そこには差し出しに「堅田両切ノ所」とある。²⁰⁾

この「所」という語は、永禄五年に記された「堅田大宮社中年中諸役并下行儀式」(以下、「下行儀式」)にも確認できる。²¹⁾これは堅田大

宮の宮座記録であり、そして先述のとおり、堅田大宮を中心とする宮座組織を形成したのは宮切と東切であった。これらの点から、先の史料の「堅田両切／所」とは、宮切と東切を指すものと推測できる。つまり、沖島の関との関わりを持っていたのは堅田全体ではなく、宮切と東切のみだったと考えられるのである^②。

さらに、『跡書』の成立とほぼ同時期の記録断簡には、「関上乘代官衆上分」という文言が記されている^③。確認できる年号が天文五年（一五三六）から同九年までであり、「天文八年十二月迄所公用十三ヶ月分六百八十文」等の記述が見られることから、「所」の公用銭についての記録であることが分かる。つまり、この当時の「関上乘」には代官が置かれ、「所」の公用銭の一部がその上分によつて賄われていたということになる。沖島の警固関、「下行儀式」、そして「関上乘」に関する史料の全てが同じ居初家に所蔵されていることも合わせて考えれば、これらに出てくる「所」が同一のものを表している可能性は非常に高い。そして同一であった場合、堅田の「特権」の一部である「関上乘」に関与していたのも、堅田全体ではなく宮切と東切だけであったことになる。

このように、堅田の諸々の活動は、堅田内部においてさらに複数の集団に分かれ、それぞれが独立して営んでいた可能性もある。もちろん、「個々の集団の集合体＝堅田」として他の浦々に優位性を持っていたと見れば、個々の集団の活動を一括りにして「堅田の活動」として把握することも無理ではない。しかし、沖島からの文書の宛所が「堅田両切」と限定されているように、堅田全体ではなくその一部と

の関係であるという意識は、その活動の当事者に確かに存在したものと考えられる。

二、両記録に見える堅田の活動

では次に、堅田の活動に関する『由来記』および『跡書』の記述を見ていくことにしたい。

『由来記』（E）

一 昔当所ハワカ船ニノセタルタヒウトタニモナヤマス間、他人ノ船ヘカイソクヲカクル事イフニヲヨハス、コレニヨリテ四十九浦ヨリ縁ミヲヒキテ樺ツ、ヲ入、ノホリクタリノ旅人荷物已下ワツライナキヤウニヲクリテタマハレナント、浦ミ津ミナトヨリ方ミヲサタメウケトリテヲクリナラハスル在所ナリ、ソレニツイテハ役所ノウハノリトサタメ、ウラノヲソノ上乘トイフ、コノウラヲ知行スルホトヒクワンモアルソ、

『跡書』（e）

当堅田湖九十九浦知行ハ、尼前カ浜ニ波ヤライノ石ヲ長ミトツキ出ス、ナキサニハ、トイニサイカシヲウヘタリ、上下ノ船ニ海賊ヲカクルナリ、浦ミノ船モ、トヲリカ子テ、堅田ニヨキエンヲ一人ツ、相定モテ、舟ノヘサキ、ハタシルシノコトク、ヒラノヲサシ上アケテ、ソソチヤウソコヘマイルフ子ト理テトラレハ、相違ナクスルノトトラスホトニ、ソレヨリソノ浦カラ、ソソチヤウソノウハノリニテ候トテ、上乘ヲウリカイニシテ、タチハノヲサウコクシテ、命ヲ果コト度ミナリ、カクスル程ニ、

浦ウラと知行ニナスコト、永正(マ) 年イタリニ至テ二百余ケ年ト云、

これらの記事は、「上乘」の成立背景を述べたものである。元々「上乘」とは、堅田以外の浦の船に対して堅田側が海賊行為を仕掛けないという保証を行ったものであり、それが『由来記』が執筆される頃には「知行」と称される状況になっていたという。

両記録の話の流れはほぼ同じであるが、互いの記述を細かく比較してみると、『由来記』では「四十九浦ヨリ縁ミヲヒキ」としているところを『跡書』では「湖九十九浦知行」と二倍近い数を挙げている。さらに、『由来記』ではその始まりを単に「昔」としているのに対し、『跡書』では「浦と知行ニナスコト、永正 年マニ至テ二百余ケ年」と具体的に記している。『跡書』の方が、上乘の及ぶ範囲の広さと歴史をより強調していると言える。

先述の「関上乘代官衆上分」に関する記録は、成立年代がちょうど『跡書』の成立と同じ頃である。つまり、『跡書』が成立した頃の「関」と「上乘」は、一括りにして管理・運営されていたことになる。そして、先の「上乘」に関する記述同様、「関」についての記述にもまた、『由来記』と『跡書』では違いが見られる。

『由来記』(一)

一 スカノヨシ、オキノヨシニツイテ、カマクラトノニテ六角方・堅田タタ両方アラソヒニテタイケツアリ、六角トノハ海ヨリ東地御知行也、堅田ハ湖十二郡ヲ知行致、其成敗ヲ仕り候トヨリヲ申ス、ナヲカタ、侍俗性王ソントムカシヨリ申ツタヘケルコトハリヲオホカタ申処ニ、六角トノハ右座、カタ、侍ハ左座ニ

ヲカセラレ、サヌキエンサ重カサエ而御前ニ祇候ツカマツル、双方問答タウキコシメサル、サテモカタ、侍ソモ／＼オキノヨシト申スハト申シアケ候ヒシヲ、ハヤキコヘテアリ、オキノヨシトイフナレハカタ、知行セイテハト聞召分ラレ問答ニカタタリ、(後略)、

『跡書』(i)

一年鎌倉殿御前ニテ、六角方ト堅田ト、オキノヨシヲ対決ノ事、カタ、ノ使者ハツ、レヲキテ、カイヲ杖ニツキ下向ス、即御前ニテ左座ニサヌキ円座ヲ重シキニシカセラレ、ソモソモコノ奥ノヨシト申ハト申アケケレハ、ハヤ湖当所知行ノ奥ト御分別アリテ、利ニフセラル、(中略)、
新田・足之ノ戦、堅田ニ新田殿タマラス、真野ノフケノ下ノ海道ニテ軍ナラス、今堅田ノキ、海津ヘアカリ、ツルカヘノキタマフ、足之殿、堅田船八艘ニテ、カイツヘ追懸給ニ、(中略)足之殿ハ軍ニカタセタマヒ、堅田ヘセキラ成下サルコト、今度忠節ヲ致ホウビト云、

これらは堅田が「オキノヨシ」の知行権について、鎌倉殿の前で六角氏と争ったという話を記している。それによれば、堅田は將軍直々に「オキノヨシ」の知行権を認められ、六角方に勝利したという。当然、真偽の程は疑わしい話だが、ここで注目したいのは、『跡書』(i)の後半部分に、『由来記』では見られない堅田の「関」の由緒が記されている点である。それによると、堅田の「関」は足利尊氏と新田義貞との戦いの際、堅田が尊氏側に味方して功績を残したため、そ

の忠節の褒美として与えられたものであるという。そして、堅田には、この「関が足利尊氏から与えられた」ことを証明するものとして、元弘三年（一一三三）に足利尊氏から与えられたという感状が伝わっている²⁴。しかし、『跡書』の記述から判断すれば、尊氏から「関」が与えられたのは、新田義貞が越前へと逃亡した建武三年（一一三六）以降ということになる。先の感状は、「関」が足利尊氏から与えられたという点は『跡書』と共通するものの、その内容の示す年代が食い違っており、偽文書であると推定される。

権利を証明するための偽文書が作成される場合、その背景として考えられるのは、その権利をめぐる訴訟が生じていたという可能性である。つまり、堅田の「関」の権利を証明する文書が偽作されたということは、堅田の「関」の運営が何者かによって妨げられていた可能性を示唆している。その可能性を裏付ける史料は今のところ無く、先の尊氏の感状が偽作された時期も不明だが、ここで注目したいのが、『由来記』と『跡書』間での、「関」および「上乘」に関する記述の違いである。

先述のとおり、『跡書』では『由来記』に比べ、「上乘」の影響の及ぶ広さと歴史の古さを強調して記している。もしこの違いが、両記録それぞれの成立時において、「上乘」の歴史を強調する必要性に差があったために生じたのだとすれば、それは『由来記』成立から『跡書』成立までの間に「上乘」を取り巻く状況が変化していたことを意味する。つまり、『跡書』が成立した頃には、堅田の「上乘」の歴史を強調する必要性がより高まっていたと考えられる。同様に、「関」

の由緒が『由来記』に記されていない理由も、『跡書』成立当時こそ「関」の由緒を語る必要性が生じていたからだと考えることができるよう。

権利を証明する文書が作られる理由と同じように、権利を妨げられるという状況が生じることで、権利の由緒はより声高に主張されるようになると推測できる。よって、『由来記』成立後から『跡書』が成立するまでの間に、堅田の「関」および「上乘」の運営に関して、何らかの障害が発生していたという可能性が指摘できるのである。

ここで前章で見た『跡書』（a）に戻るが、この記事の内容もまた『跡書』だけに記された話であり、そしてそこには、堅田の「関上乘」が奪取された様子がはつきりと記されている。つまり、『跡書』の執筆者の理解する「関上乘」の姿とは、堅田の絶対的な権利ではなく、他者によって脅かされるものであったことになる。

そもそも、『由来記』より前の史料に現れる堅田の「関」は、その主導権が山門にあると考えられる。応永十八年（一四一一）、室町幕府は延暦寺に命じ、妙法院領であった近江国栗見本荘の年貢を勘過させるよう「近江奥嶋・堅田・坂本等」の諸関に下知させている。また、文安五年（一四四八）七月には、「坂本関々、并堅田・船木已下諸関」が異儀に及んだために南禅寺仏殿建造用の材木の運送が滞っていると、幕府から山門に対し、各関に「可勘過之旨、厳密可被下知」と要請が出されている。²⁵つまり、その成立事情はともかく、堅田の「関」は山門の影響下にあったのである。

先の『跡書』（a）の話の中では、堅田から「関」を奪ったのは他

ならぬ山門からの攻撃であつた。『跡書』の成立当時に、堅田の「関」の運営に対して、現実には山門から何らかの圧力があつたのかどうかは分からない。しかし、「関」が堅田に絶対的に帰属するものではないという危機感は、堅田の中に確かに存在していたものと考えられる。そして『跡書』の成立当時には、その「関」と「上乘」は一括りにして把握されていた。「関」の運営に何らかの危機が生じていたと仮定すれば、同時に「上乘」にも影響が及んでいた可能性は十分に考えられる。先述の『由来記』(E)と『跡書』(e)における記述の違いは、こうした状況を受けて、『跡書』執筆時に「上乘」の由緒をより強調しようという意志が働いたことによるのではないだろうか。

そして、『由来記』(I)、『跡書』(i)に記された「オキノヨシ」に関して言えば、他者によって脅かされていたという事実を、別の史料からはつきり確認することができる。

堅田惣庄知行分之事、条々有子細、数年雖申付之、依令懇望、返付之上者、其段可被存知者也、仍状如件、

永正十

拾月廿七日

貞説(花押)〔伊庭貞説〕

諸浦中²⁷⁾

これは、永正十年(一五一三)十月、六角氏の守護代であつた伊庭貞説が、「諸浦中」に宛てて「堅田惣庄知行分」返還の旨を通知したものである。さらに、同じ日付で貞説の前代の伊庭貞隆から「堅田惣庄中」に宛てて出された書下に、

当庄知行分奥嶋・同沖蘆并諸浦役・諸公事等之事、子細在之、近

年随申付之、種々懇望候条、如元返付訖、然上者於向後不可有相違者也、仍状如件、

永正十

拾月廿七日

貞隆(花押)〔伊庭貞隆〕

堅田惣庄中²⁸⁾

というものがある。ここから、先の「堅田惣庄知行分」の詳細が「奥嶋・同沖蘆并諸浦役・諸公事等」であつたことが分かる。「堅田惣庄中」というのは、おそらく先の「堅田両切」など一部の集団を指すものに對し、堅田全体を指しての呼称であろう。また、「諸浦中」というのは、琵琶湖岸の諸浦を指しているのではないかと思われる。

永正十年当時、伊庭氏と六角氏の間は不仲であり、さらに翌年二月、伊庭氏は六角氏に反乱を起こしている。従つて、これらの書状は伊庭氏が堅田を味方に付けるために出したものではないかとも考えられ、その成立の背景については別途検討が必要であるが、ここで指摘したのは、奥嶋の蘆等が堅田側に「返付」されているという点である。「返付」ということは、それ以前に一度は堅田が所有していたこととなる。つまり、永正十年より前の時点で、堅田は「奥嶋・同沖蘆并諸浦役・諸公事等」を知行しており、さらに、その権利は一度六角氏の手に移っていたと考えられるのである。

これらの史料が出された年代は、『由来記』の成立時期と近い。堅田が「オキノヨシ」の知行を六角氏と争い、將軍直々に認められたという壮大な由緒は、おそらくこうした現実の事情を受けて成立したものであろう。

従来の研究では、『由来記』、『跡書』に記されたこうした「特権」等の由緒は、堅田の持っていた力を物語るものとして用いられてきた。しかし、実際にはこれらの由緒は、堅田がその活動を阻害されていた（あるいはその恐れがあった）ために、自らの立場を強化する目的で語られていた可能性がある。さらに言えば、先の「上乘」や「関」の例が示すように、『跡書』成立当時はその必要性がより高まっていたと考えられる。経済的な活動が阻害された場合、当然その影響は堅田全体に及ぶはずである。本福寺の住持が寺の記録の中にあえて記したのは、その由緒を主張することが自らの利害にも関わる問題だったからであろう。

おわりに

以上、中世堅田研究における史料批判の問題点を指摘し、また、それを踏まえた上で、中世後期の堅田の実態について、『由来記』および『跡書』の記述から可能な限り考察を試みた。

『由来記』や『跡書』の記述には執筆者の主観が入り込む余地があり、事実かどうか判断できないものが多い。したがって、それだけを用いて堅田の実態を語ることはできない。そして、他の史料から分かることを踏まえて両記録の記述を考えたとき、そこに见えてくるのは、堅田がその活動を他者によって妨げられていた可能性である。それはつまり、堅田の「特権」が決して絶対的なものではなかったということを示している。

また、堅田は内部で複数の集団に分かれ、それぞれが独立して活動

していたと考えられ、その有り様を詳細に論じるためには集団ごとの検討が必要である。例えば先述の漁業や沖島の「警固関」等は、堅田全体の「特権」として考えるよりも、そのさらに一部の集団の活動として考えるべきである。

このように、堅田の活動の有り様は、「特権」と一言で説明するにはいささか複雑な様相を呈していた。先行研究では、堅田の活動全体を最初から「特権」（関・上乘・漁業・廻船）の大枠にはめてしまい、そのため、他の浦々との関わりに対しても限定的な視点を持たせてしまっていると言える。堅田の活動については、住民集団それぞれの関係等も含め、より多くの視点から考察する必要がある。

また、『由来記』および『跡書』の記述を用いる上で、先の活動の問題とも関わり、考慮するべきものとして、堅田の身分構造の問題がある。本稿では詳しく触れなかったが、中世堅田の二大身分階層とされる「殿原」と「全人」は、中世堅田の成立から近世の郷士身分に関する問題まで通じ、堅田の住人身分を語る上での基本事項となっている^②。しかし、この「殿原」と「全人」は、『由来記』、『跡書』の記述以外にその存在を確認することができない。したがって、本稿で指摘した史料批判上の問題点がここでも適用されることになり、やはり再検討を要すると言える。

これまでの研究では、『由来記』、『跡書』の記述に安易に頼りすぎ、その結果、事実かどうかの検証が曖昧なままに通説が作られてしまった。今後の堅田研究では、史料の再検討はもちろん、『由来記』や『跡書』の記述とは別の視点を求めていくことが必要であろう。

〔注〕

- (1) 網野善彦「近江国堅田」(『網野善彦著作集 第十三巻』、岩波書店、二〇〇七年、初出・一九八一年)、横倉譲治『湖賊の中世都市近江国堅田』、誠文堂新光社、一九八八年。
- (2) 中世堅田の研究は、戦前の漁業面に関するものから始まり、戦後は一向一揆の拠点として注目を集め、さらにそこから派生して、集落そのものの有り様や住民の身分構造などにも目が向けられるようになった。この中世堅田の研究史については、網野氏によって詳しくまとめられている。(前掲注〔1〕 網野氏論文)
- (3) 『由来記』は表紙を欠くが、料紙に明宗宛の書状の紙背が使われている。明誓の筆とする説もあるが、この点については神田千里氏が筆跡などの違いにも触れた上で明宗によるものと述べている。(神田千里『本福寺跡書』に関する一考察」(同『一向一揆と真宗信仰』吉川弘文館、一九九一年 初出・『佛教史学研究』三十三号、一九九〇年) この史料が初めて翻刻された『真宗全書』において『本福寺由来記』という仮題が付けられて以降、この名が定着しており、本稿でもそれにならった。
- (4) 表紙に『本福寺跡書』と書かれ、明誓の署名がある。なお、本稿執筆にあたり参照・引用した『由来記』および『跡書』は、全て『本福寺旧記』(千葉乗隆編、同朋社、一九八〇年) 所収の影写本および翻刻史料による。
- (5) 『由来記』は、記事内容の時代が判明するものの中で、最も時代が降るものが永正四年の記事であり、また、永正六年の本福寺第四世明顕の死亡記事が存在しないことなどから、永正四年から二年間の間に成立したとされる。(村上學「本福寺由来記」から「本福寺跡書」へ」(『名古屋工業大学学報』四〇号、一九八八年) 一方『跡書』は、天文九年の出来事と推定される明宗の死亡に関する記事があることや、明誓が破門中に記したものと考えられる点から(破門は天文十年十一月以降に解かれている) その前後の成立と推測されている。(永井隆之『戦国時代の百姓思想』第一章第一節、東北大学出版会、二〇〇七年)
- (6) 水戸英雄氏は、『跡書』に対する史料批判の甘さについて指摘している。(水戸英雄「堅田一向一揆の基礎構造」(『歴史学研究』四四八号、一九七七年) ただし、水戸氏の論考では『由来記』を『跡書』の草稿であると位置づけており、両記録の記述は並列的に扱われている。村上學氏はその論考の中で、『由来記』と『跡書』の間では、本福寺第三世法住の描き方かなりの差があることを指摘した。そして、その違いの背景には、両記録の執筆当時に本福寺が置かれていた状況の違いがあるのではないかと考察している。(前掲注〔5〕 村上氏論文) ただし、その考察の対象は本福寺の動向を記した記事に絞られており、堅田の有り様に関する記述についての比較、検討は行われていない。
- (8) 前掲注〔3〕 神田氏論文。
- (9) 表一参照。『跡書』の一〇七番目の記事、他。
- (10) 千葉乗隆『本福寺史』(同朋舎、一九八〇年)、前掲注〔5〕 村上氏論文。
- (11) 服部之総『蓮如』(新地書房、一九四八年)、石田善人「畿内の一方向一揆について―その構造論を中心として―」(『日本史研究』二十三号、一九五四年)、新行紀一「一行一揆の基礎構造―近江国堅田を中心に―」(『歴史学研究』二九一号、一九六四年) など。
- (12) 前掲注〔3〕 神田氏論文。
- (13) 小栗栖健治「宮座祭祀の史的研究」(第二部第一章、岩田書院、二〇〇五年。小栗栖氏は、堅田における「四方」には二つの概念が存在したとしている。もうひとつの「四方」は堅田大宮の別の宮座組織である四座を表しており、これは集落別ではなく、中世以来の地侍の系譜を引く集団を意味するものであったという。
- (14) 伊藤裕久「中世集落の空間構造―惣的結合と住居集合の歴史展開―」第二章、生活史研究所、一九九二年。
- (15) 「菅浦文書」三九七号
- (16) 前掲注〔11〕 新行氏論文により指摘され、以降の研究にも引き継が

れていた。

- (17) それぞれの漁師集団の違いについては、高島幸次氏が検討を加えているのを始め(同氏「堅田の漁業―その史的研究の前提として―」〔千葉乗隆編『衣川―地域史研究Ⅰ―』、同朋舎、一九七六年)、近年には鎌谷かおる氏も論及している。(同氏「近世琵琶湖における堅田の漁業権」〔『ヒストリア』一八一号、二〇〇二年〕)

- (18) 例えば万治三年(一六六〇)には、東之切町が波除の石垣を築いていた場所です。西之切漁師が網を引いたとして、両者の間で相論になっている。(『西之切神田神社文書』〔喜多村俊夫編『江州堅田漁業史料』へ『日本常民生活資料叢書』一八巻、三一書房、一九八二年〕所収)

- (19) 「居初家文書」(本稿に引用した「居初家文書」は、注記しない限り全て大津市歴史博物館所蔵の影写本による)

- (20) 「居初家文書」

- (21) 「居初家文書」

- (22) 本稿に引用した沖島の警固関の史料の他、数点は鍛代敏雄氏によって「新居初家史料」として紹介されている。(同『中世後期の寺社と経済』第三編第三章「関所試論―戦国期の新関―」、思文閣出版、一九九九年〔初出・『日本歴史』五〇七号、一九九〇年〕)なお、鍛代氏はその論考の中で、「両切」を「宮切・西切」としているが、その論拠は示されていない。どちらにせよ、沖島との関係が堅田全体ではなく「両切」と限定的に意識されていたことは読み取ることができよう。

- (23) 「居初家文書」

- (24) 「居初家文書」(滋賀県立図書館所蔵の影写本による)

- (25) 「妙法院文書」 応永十八年十一月八日条(『大日本史料』第七編之十四)

- (26) 「南禅寺文書」 一六〇号

- (27) 「居初家文書」

- (28) 「釣狛師組共有文書」(注〔18〕喜多村氏編著所収)

- (29) 『新修大津市史 第二巻』第四章第二節。

- (30) 「殿原」と「全人」は、下鴨社の御厨であった堅田の供御人の系譜と関わるものと考えられており(前掲注〔6〕水戸氏論文など)、両者の立場の違いが、各宮座の座格や近世の郷士身分にも関係すると思われる。(前掲注〔13〕小栗栖氏論文)

〔付記〕

本稿は修士論文の一部を加筆修正したものである。修士論文の執筆においては指導教員である貝英幸先生に、また、「居初家文書」の閲覧にあたっては、大津市歴史博物館学芸員の高橋大樹氏に多大なご助力を頂いた。この場を借りて、厚く御礼申し上げる。

(たぐち あや 文学研究科日本史学専攻博士後期課程)

(指導教員：貝 英幸 准教授)

二〇二二年十月一日受理